

「食事のことば」を機縁とした

法話集

あまのこころを
生かす世の
悪を
立眼の
ちかみと
ちかみと

浄土真宗本願寺派
大分教区

「御同朋の社会をめざす運動—実践運動—

兼 子ども若者ご縁づくり推進部会」

教学部・布教団・子ども若者ご縁づくり推進部協作

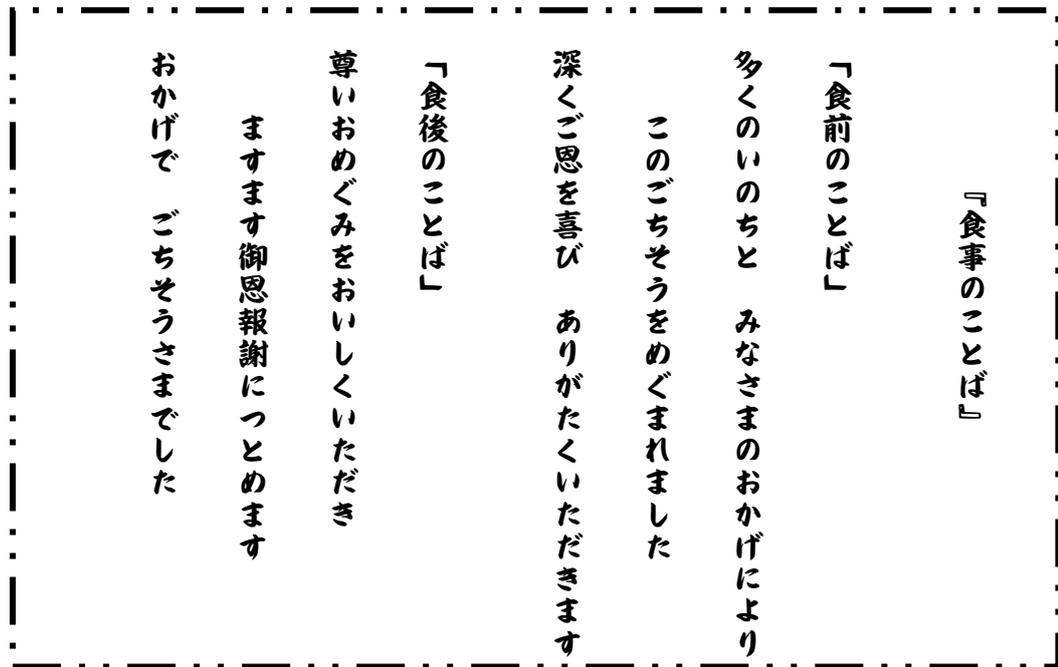
「法話集」 発刊にあたって

慈光のもと、貴寺におかれましてはお念仏相続のことお慶び申し上げます。

この度、大分教区の教学部、布教団、子ども・若者ご縁づくり推進部の協力により『食事のことば』を機縁とした”法話集”を作成いたしました。

毎日の「いただきます」「ごちそうさま」の言葉を通して、生きてゆく上で大切な食事を、有り難くいただき、ご恩報謝の生き方に気づき、またご法話を通して、合掌し、お念仏を称えるご縁になればとの思いを持って作成いただいております。各寺院に三部をお送りいたしますので、寺院行事等にご活用いただければと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

大分教区教務所長 梶原 教 朗



目次

- 1、はじめに
- 2、「食事のことば」
大分教区布教団副団長 中津組光楽寺 摂受定信
- 3、「食事のことば ～ご馳走さま～」
大分教区布教団副団長 大海組長光寺 大在紀
- 4、『浄土真宗の食事のことば』
大分教区青年布教使代表 大海組妙蓮寺 蓮谷啓介
- 5、「食事のことば」
大分教区子ども若者ご縁づくり推進部 中津組明蓮寺 重松祐誠
- 6、『食事のことば』によせて ～ご恩が知れたとき～
大分教区子ども若者ご縁づくり推進部 大野組最乗寺 大原瑞雲
- 7、「食事のことば」を機縁とした法話作成の上での留意点
大分教区教学部会

1、はじめに

【ねがい】

日本の食卓から「いただきます」「ごちそうさま」の言葉が消え去りつつある、という現実。合掌しお念仏を申す姿が、浄土真宗のご門徒の子育て家庭でほとんど見られない、という現実。キッズサンガの運動が大分教区で動き始め、子ども若者ご縁づくりと名称を変えながら運動が進められる中で、この現実といかに向き合い、これをどう克服していくのか、という課題が突き付けられていました。

大分教区では推進事業計画の中で「教区における各連盟・教化組織等が『子ども・若者ご縁づくり』を共通した重点目標とし、各家庭で、具体的な形として実践されることを願いとしています。～朝夕のお参り、『食事のことば』の励行、法事などの仏事のご縁を大切にするなど～」をかかげています。特に、『子ども・若者ご縁づくり』の総合テーマにもある、全世代が「お寺を居場所」としながら「合掌しお念仏申す」人となることを中心の願いと据え、誰でもできる具体的な実践として「食事のことば」の励行をかかげています。

この「食事のことば」が全ご門徒の家庭で唱えられ、「合掌しお念仏申す」機縁としていただきたい。そして、「いただきます」や「ごちそうさま」が消えていこうとしているすべての食卓に！さらに、世界に！あの「MOTTAINAI キャンペーン」のように、その言葉の大切さと、意味を伝えていきたい！と考えています。法味ドロップがその第一弾と位置付けるなら、

その第二弾として、この度、寺院に向けての「食事のことば」を機縁とした法話集を作成して全寺院・僧侶に届けます。これを参考にしながら、様々なご縁の折に「食事のことば」を機縁とした内容のご法話を行っていただきたい。そして、日常の法務の中で子ども若者を意識したご縁づくりを進めていただきたいと念じています。

【法話集の作成にあたり】

教学部・布教団・子ども若者ご縁づくり推進部との協同で、上記の「法話集」を作成しようと、2年間に渡り話し合いを重ねてきました。そこで、まずは我々が学びを深めようと、2018年の2月に教学部代表の松嶋智讓さんによる『「食事のことば」の普及に向けての研修会～教学的な押さえを学び、大衆にわかりやすい法話を作成～』の研修会を全教区内に案内をお届けして開催しました。（その資料は巻末に掲載しておりますので参考にしてください。）

その研修会を受けて、5名の方にご法話の執筆を依頼し、内容の検討も重ね、この度『「食事のことば」を機縁とした“法話集”』を作成することができました。

この法話集を多くの僧侶の皆さまにご参考にしていただき、全世代のご門徒が「お寺を居場所」としながら「合掌しお念仏申す」機縁となることを念じてやみません。

この紙面をお借りして、ご協力いただきました全ての関係者の皆さまにお礼を申し上げます。

2、「食事のことば」

大分教区布教団副団長
中津組光樂寺 摂受定信

【ご讃題】

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても 報ずべし
師主知識の恩徳も ほねをくだきても 謝すべし」
(『正像末和讃』 註釈版聖典 P610)

何と読みますか、、、味わいますか？

「米」は「こめ」ですか？「飯」は「めし」「はん」ですか？
昔から、尊いものには尊敬の思いから「お」や「ご」を付けてきました。わず
か一粒の米にも「おこめ」と味わい、出来上がったものを「ごはん」と言っ
てきました。お茶碗の中には、多くのお米のいのちが、この私のいのちを支えて
くださっています。

阿弥陀様の願いの中で生きるものを「衆生」と教えてくださいました。「衆
多の生を受ける」私であり「衆と共に生きる」いのちの私です。私のいのちは、
肉や野菜の限りある命を頂いて生かされているいのちであり、共に仏になる「無
量寿のいのち」なのです。

「さっき口にしたのは食べ物ではない。他の者の子どもです（茉莉花）」とい
う詩にも出会いました。

食事に対する感謝の心（意）を、姿（身）と言葉（口）に表すことが大切で
す。「感謝」とは「謝を感じる」と書き、「謝とは、謝（あや）まる」と読め
ます。つまり「感謝とは、謝ることを感じる心」が「ありがとう」なのです。
謝るところかあたりまえと生活している私たちが、御恩報謝の心を阿弥陀様か
らいただき、慚ぎの心と感謝の心で「ありがとう」の生活をしたいものです。

尊いいのちをいただきながら「あたりまえ」としか感じない私たちの心に響
いてくださるのが「おかげさま、もったいない」の心です。

「おかげさまは、感謝の世界」「あたりまえは、不平不満の世界」なのです。
料理を作ってくれた人への感謝の心、生産・流通に携わっている方々への感謝
の心、一番大切な食材のいのちへの感謝の心を忘れないように、御恩報謝の生
活につとめていきましょう

「お・おかげさま も・もったないと て・手を合わす
な・南無阿弥陀仏と し・称名念仏の生活を」

食材から「おもてなし」をされているいのちを大切に、私のいのちを支えてい
る「ご縁」を大切にさせていただきます！



3、「食事のことば ～ご馳走さま～」

大分教区布教団副団長
大海組長光寺 大在紀

【ご讃題】

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。
たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」

(御本典教文類『総序』 註釈版聖典 P132)

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得ることはできない。思いがけずこの真実の行と信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ」(現代語版 P5)

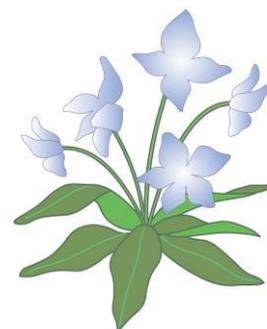
「ご馳走を恵まれました」「ご馳走様でした」と、食前の言葉にも食後の言葉にも共通して「ご馳走」という言葉が用いられています。馳走とは、本来は食事の準備のために走り回る様子を意味する言葉ですが、それがそのまま走り回って準備された食事そのものを指す言葉になりました。

以前、東南アジアの漁師さんが、アミと呼ばれる小さなエビを獲る漁の様子をテレビで見たことがあります。大部分は日本向けに輸出され、そのまま食用にするだけでなく、釣りえさに用いられると説明されていました。私は驚きました。それまで映像を見ていた私は、その漁師さんのことを、私とはまったく関わりの無い人と思って見ていましたが、ひょっとするとその漁師さんが獲ったアミを餌にして釣られた魚を私が食べたことがあるかもしれないと気づかされたからです。

仏教は、縁起の法を説きます。あらゆる物事はすべて因果関係で成り立っている、物事は単体では存在しない、ということです。私たちは自分の見える範囲の縁しか感じませんが、じっくりと縁起の法をつきつめていくと「私と関係の無いものは存在しない」という結論に達するのです。

どんな食材でもそうですが、たとえば魚を食べる時には、その魚そのもののいのちをいただくので「いただきます」と言うだけでなく、その魚を調理した人・運んだ人、その魚を釣るためのえさになったいのち、その魚が成長するまでに食べられたいのち、えさとなったアミなどを捕獲した漁師、さらには、包丁や鍋やまな板などの調理道具を作った人・運んだ人、調味料を作った人・運んだ人、箸や皿を作った人・運んだ人にまで思いをめぐらせ、「多くのいのちとみなさまのおかげにより……」と、食事の背景にあるものすべてに感謝の思いを持ちながらいただきたいものです。

もちろん、こんな大切な事に気づかせてくださった仏さまのことも思いながら、エサではなく食事として、言葉通り「有り難く」いただきましょう。



4、『浄土真宗の食事のことば』

大分教区青年布教使代表
大海組妙蓮寺 蓮谷啓介

【ご讃題】

「諸有の人民・蝸飛蠕動の類、阿弥陀仏の光明を見ざることなきなり。見たてまつるもの、慈心歡喜せざるものなけん」

(御本典真仏土文類『大阿弥陀経』引文 註釈版聖典 P341)

阿弥陀様はあらゆる命を、命の奪い合いがないお浄土へ仏様として生まれさせたいという願いを完成されました。ですから、阿弥陀様は私たち人間だけでなく、あらゆる動植物や名もなき小さな虫にまで至り届いておられます。それを親鸞聖人は、「諸有の人民・蝸飛蠕動の類、阿弥陀仏の光明を見ざることなきなり。見たてまつるもの、慈心歡喜せざるものなけん」というお経のご文をもって、私たちが共に生まれ往くお浄土のすがたをお示しになりました。

そうすると、私たちが毎日食べている肉や魚や野菜や米は、阿弥陀様がお浄土に生まれさせ仏様にしたいと願われ続けた命だったのです。では、同じく阿弥陀様から願われた命を奪い、それを食べてまで私たちはなぜ生きるのでしょうか。

ある時、「なぜ生きるのか」を子ども会で聞くと「遊ぶため」「学校へ行くため」「夢を叶えるため」と素直な答えが返ってきました。また、ある老人会で尋ねると「働くため」「家族を守るため」「子孫を残すため」といった率直な意見が出されました。しかし、考えてみるとそれらは他の命を奪って生きる正当な理由にはならないはずです。どれも奪われる命からすれば私たちの勝手な理由に過ぎません。また、必ず訪れる「死」の前では、それらの理由は全て行き詰ります。

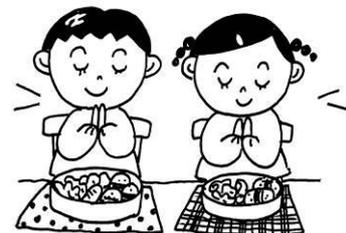
では、私たちが生きる本当の理由とは何でしょうか。それは、阿弥陀様の願いが私の命にも届いていることを聞いて、死んだらお終いではなく、必ず仏様に成らせて頂く身と成ることなのです。もちろん、それも他の命を奪う正当な理由には決してなりません。しかし、阿弥陀様から同じく願われた命を奪って生きる私が仏様に成らせて頂いて、今度はそれら全ての命をお浄土に生まれさせ仏様とすることこそが、他の命を奪って生きる者に遺された道であるはずで

す。

なぜなら、浄土真宗は仏教だからです。それは、仏様の教えであり、仏様に成らせて頂くみ教えです。その私たちが申し上げる「食事の言葉」は他の命を奪う勝手な言い訳ではありません。罪滅ぼしのためでもないはずです。

それは、奪った命への懺悔と深謝を述べる言葉であり、それを私のところまでご用意くださった皆様に対する感謝の思いです。そして何よりも「生きる意味」を自らに問う言葉なのです。

そうして、阿弥陀様に願われた「多くの命と皆さまのおかげにより」この命が許され、仏法聴聞のなかで生きる意味(=食べる意味)に出会えたとき、本当に深く御恩がよろこべる報謝の生活が始まるのです。





5、「食事のことば」

大分教区子ども若者ご縁づくり推進部
中津組明蓮寺 重松祐誠

【ご讃題】

「十方微塵世界の念仏の衆生をみそなはし摂取して捨てざれば阿弥陀と名づけたてまつる」
(『浄土和讃』 註釈版聖典P571)

全ての世界の全てのいのち、一つ一つを一人子のように見つめてくださりその大きな親心で抱きしめて決して離すことがないので阿弥陀とお呼びするのです。

私たちは毎日、多くのいのちを食べて生きています。食べ物だけではありません、住むところも着るものも、皆いのちをいただいているのです。そのいのちは、阿弥陀さまが全ての世界の全てのいのちと誓われるように、一つ一つが私と同じように、阿弥陀さまから一人子のように思われている大切なものなのですね。

もうずいぶん前になりますが、夏休みの子ども会に大分市からKさんというお兄さんが手伝いに来て下さいました。夕食のカレーライスの前に座っている子どもたちに、Kさんがこんな話をして下さいました。

Kさん「みんなの目の前にあるカレーライスには、たくさんのお米があるね。そのお米はどこで作られますか？」

子ども達「田んぼで一す」

Kさん「そう、田んぼだね。じゃあ、お米一粒を田んぼで育てると、秋にはどれくらいのお米がとれるか知っていますか？」

子ども達「10粒くらい!」「50粒くらい!」「わかりませーん」

Kさん「実は、大切に育てると一粒のお米からご飯茶碗一杯くらいのお米がとれるそうです。」

子ども達「すごーい!」

Kさん「すごいね。だから今からみんなでカレーライスを食べますが、お米をお皿の上に一粒残すとお茶碗一杯残すのと同じ事になります。もったいないね。残さないように綺麗に食べましょう」
子ども達「はーい!」

Kさん「それでは、食事の言葉を言いましょう。合掌。多くのいのちと～」

子ども達はカレーを楽しく食べ始めました。ご院家さんの前に中学生が座ってましたが、その中のJくんに話しかけました。

院家「さっきのKさんの話わかったか？」

Jくん「うん、わかった! ご飯を一杯食べ残したら、それは元々たった一粒の米だったという話じゃね…俺、頭良から!」

院家「何が、頭良からじゃ、ちっとも良くないわ!素直に聞かんか!」たった一粒のお米も、大切に育てれば茶碗一杯になるいのちの不思議があると聞いて、ご飯一杯無駄にしても、元はたった一粒じゃないかと聞いてしまう、自分の都合で考える一恐ろしいことだなと思いました。でもそれはJくんだけではありません。私たちにもあるんじゃないでしょうか。「このお肉かたいからいらない」「もう食べられない」「好きじゃない」「これ嫌い」と勝手な理由をつけて平気で残すことは、いのちをゴミにすること。いのちのお陰や不思議ないのちのことを考えようともしないことは、恐ろしいことだよ。そしてその多くのいのちは、阿弥陀さまに一人子のように思われている大切ないのちだものね。そう私と同じ大切ないのちなんだよね。

全ての世界の全てのいのち、一つ一つを一人子のように見つめてくださりその大きな親心で抱きしめて決して離すことがないので阿弥陀とお呼びするのです

大切ないのちをゴミにしても平気である、そんな私を、一人子のように抱いていて下さる阿弥陀さまがいて下さいます。感謝してお念仏申しませう。

6、『食事のことば』によせて ～ご恩が知れたとき～

大分教区子ども若者ご縁づくり推進部

大野組最乗寺 大原瑞雲

【ご讃題】

「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即のとき必定に入る。ただよくつねに如来の号(みな)を称して、大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。」

(御本典行文類『正信念仏偈』 註釈版聖典 P205)

私のいのち、どのようにして今ここにこうしてあるのでしょうか。自分で作ったわけでもなく、自分ひとりの力で生きてきて、今があるわけでもないようです。あたり前のことのようにですが、振り返ってみると、私の「いのち」って不思議ないのちですよね。

仏様は、私のいのちは、いのちを恵んでくださった両親、そして、両祖父母をはじめ先祖の数は、私たちの頭では数えきれないほどの多くのいのちの繋がりの上に恵まれた尊いいのちであること。そして、この世にいのちを恵まれてから後も、たくさんのいのちに支えられ、さらに、多くのいのちをいただいて生かされてきた大切ないのちであること、を教えてくださいました。

私たちはともするとそのようないのちの繋がりの上に恵まれた尊いいのちであることや、たくさんのいのちに支えられていることを忘れてしまっているようです。さらには、それが生きるためとはいえ「多くのいのち」を食しているという事実があります。

そのような私たちが「南無阿弥陀仏」と称えつつ「いただきます」「ごちそうさま」と手を合わせるということは、みえにくい「多くのいのち」や「皆さまのおかげ」に支えられ、生かされているご恩を思い、食してきた「いのち」に感謝する姿です。

ある時、こんなことがありました。

「先生、わたし、トマトのいのちをいただいたよ。」

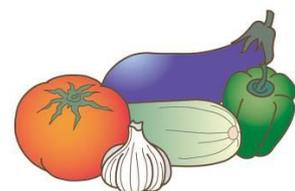
一と、真剣な眼差しで言ってきたのです。子ども園では園庭でミニトマトを育てており、今日、その赤く色づいたトマトを収穫していただいたのです。「そうだね、トマトのいのちはAさんのいのちになって元気をくれているよね。そんなトマトに『…深くご恩を喜びありがたくいただきます』といただいて、いただいた後は『尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝につとめます…』とトマトのいのちが私のいのちとなってくださって、ありがとうございます、とお礼が言えてよかったね。」

「じゃあ、今日も友達と元気いっぱい遊ぼうね」

「うん！」

一と、お友達の輪に走っていきま—

トマトをいただいたとき「ふっ！」と「トマトのいのちをいただいた」と感じたAさん。ちょっぴり悲しい気持ちになったのでしょうか。心の中でトマトに「ありがとう、でも、ごめんなさい」とお礼が言えた思いを、一緒に大切にしつつ、阿弥陀様のご恩を思い、お念仏申す生活をしていきたいものです。



7、「食事のことば」を機縁とした法話作成の上での留意点

大分教区教学部会

1、「縁起」

此が在るとき彼が在り

此が生起するに依りて彼が生起す

此が無いときに彼は無く

此が止滅するとき彼は止滅する 『ウダーナ』自説経

2、去現来、あらゆる事象を通じて、我一人が為の如来様の御慈悲がはたらい下さっている。食事のご縁も、単に生きながらえるための食事ではなく、御慈悲の働きの只中にある事を知らせたもう尊い仏縁であることを知る事が何より大切なことです。（その意味では、旧文の「みほとけと」が無くなった事で意義が薄弱化した面は否めない）

3、ご恩・おかげという言葉は、非常に耳障りの良い言葉ですが、誤用によって免罪符のように伝わってしまうことも事実です。

先んじて届いて下さるお救いを聞き受けた者にとっては、日々の生活は御報謝に直結します。しかし、ご恩・おかげを前に出しながら、そこに「先んじての救い」が無いならば、御報謝は手柄となり、いわゆる賢善精進と何ら変わりありません。「ご恩」と「見返り」「返礼」との違いを表現することも大切なことです。

4、「蓮如上人御一代記聞書」という文書では、日常生活の様々な有り様の中に、阿弥陀様の御慈悲を恵まれた念仏者の味わいが遺されています。一方で、御開山聖人の御法義を正確に理解していないと、中には教学的に誤ってしまう表現も多数含まれています。

正確な理解の上で用いるとき、それは蓮師の本来意図された「伝えたいこと」が見えてくる御遺訓とも言うべき、現代にも通じる平易な表現が沢山ありますので、食前食後の言葉から法話を構築する場合には、活用させて頂くのも良いのではないかと考えます。

【『蓮如上人御一代記聞書』より引用例】

「勸修寺村の道德、明応二年正月一日に御前へまゐりたるに、蓮如上人仰せられ候ふ。道德はいくつになるぞ。道德念仏申さるべし。自力の念仏といふは、念仏おほく申して仏にまゐらせ、この申したる功德にて仏のたすけたまはんずるやうにおもうてとなふるなり。他力といふは、弥陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり。そののち念仏申すは、御たすけありたるありがたさありがたさと思ふころをよろこびて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申すばかりなり。されば他力とは他のちからといふころなり。この一念、臨終までとほりて往生するなりと仰せ候ふなり。」（註釈版聖典 P1231）

「前々住上人仰せられ候ふ。「嚙むとはしるとも、呑むとしらすな」といふことがあるぞ。妻子を帯し魚鳥を服し、罪障の身なりといひて、さのみ思ひのままにはあるまじきよし仰せられ候ふ。」（註釈版聖典 P1257）

「仏法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。仏法のうへよりは、世間のことは時にしたがひあひはたらくべきことなりと[云々]。」(註釈版聖典 P1281)

「ある人申され候ふと[云々]。われは井の水を飲むも、仏法の御用なれば、水の一口も、如来・聖人(親鸞)の御用と存じ候ふよし申され候ふ。」(註釈版聖典 P1282)

「御膳まあり候ふ時には、御合掌ありて、如来・聖人(親鸞)の御用にて衣食ふよと仰せられ候ふ。」(註釈版聖典 P1284)

「ある人いはく、前々住上人(蓮如)の御時、南殿とやらんにて、人、蜂を殺し候ふに、思ひよらず念仏申され候ふ。その時なにと申して念仏をば申したると仰せられ候へば、ただかはいやと存ずるばかりにて申し候ふと申されければ、仰せられ候ふは、信のうへはなにともあれ、念仏申すは報謝の義と存ずべし。みな仏恩になると仰せられ候ふ。」(註釈版聖典 P1287)

「蓮如上人、あるいは人に御酒をも下され、物をも下されて、かやうのこともありがたく存ぜさせ近づけさせられ候ひて、仏法を御きかせ候ふ。さればかやうに物を下され候ふことも、信をとらせらるべきためと思し召せば、報謝と思し召し候ふよし仰せられ候ふと[云々]。」(註釈版聖典 P1299)

「万事につけて、よきことを思ひつくるは御恩なり、悪しきことだに思ひ捨てたるは御恩なり。捨つるも取るも、いづれもいづれも御恩なりと[云々]。」(註釈版聖典 P1328)

「蓮如上人、御廊下を御とほり候ひて、紙切れのおちて候ひつるを御覧ぜられ、仏法領の物をあだにするかやと仰せられ、両の御手にて御いただき候ふと[云々]。総じて紙の切れなんどのやうなる物をも、仏物と思し召し御用ゐ候へば、あだに御沙汰なく候ふのよし、前住上人(実如)御物語り候ひき。」(註釈版聖典 P1332)

5、三経七祖の教学から、この食前食後の言葉の「裏付け」となるべき法語は、直接的には無いと考えるべきです。それは、そもそも『無量寿経』を正依とする御当流の御法義は、「私」が信心を獲て念仏申すこと一つが肝要であり、あらゆるお示しは、この事一つを勧めたもう釈迦教であり、それら全体が我が心身を引き受け浄土往生をせしめる弥陀法そのものです。ここにおいて、私の罪を沙汰したり、或いは私に人の善悪を示して所謂”善い人”にならねばならないとする示唆は全くありません。食前食後の言葉も、その勧めるべき肝要は、他力念仏の道に帰結するのであり、又、他力念仏の救いに出遇ったものにとつての報謝の味わいから逸脱するものでもありません。

以上の点を踏まえて言えることとしましては、宗祖が本典総序にて仰せになった、

「噫、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。」

という遇法の慶びを親しくして、「ご恩報謝」という言葉の意味するところを含めて、弥陀法に帰すべき事をお伝えする法話になるようにしたいものです。

《表紙の歌》

あわれわれ生々世々の悪をしらず
慈眼のまえになにをあまゆる

《裏表紙の歌》

いだかれてあるともしらずおろかにも
われ反抗す大いなるみてに

— 九条武子さま “自筆の歌集より” —
[速見組覚正寺所蔵]

【九条武子さまの略歴】

西本願寺第 21 世明如（大谷光尊）門主の次女。義姉・大谷籌子（大谷光瑞夫人）裏方を助けて仏教婦人会を創設し、1911年（明治44年）に籌子裏方が死去した際には本部長に就任、同会運営の重責を果たした。京都女子専門学校（現・京都女子大学）を設立、1923年（大正12年）9月1日の関東大震災で自身も被災するが一命を取りとめ、全壊した築地本願寺の再建、震災による負傷者・孤児の救援活動（「あそか病院」などの設立）などさまざまな事業を推進した。また、和歌にも長け、歌人としても、『金鈴』『薫染』などの歌集、随筆『無憂華』などがある。1928年（昭和3年）2月7日、震災復興事業での奔走の無理のためか敗血症発症、42歳で念仏のうちに往生された。宗門では、武子さまの命日を如月忌（きさらぎき）とさだめている。



※宗門総合振興計画の事業の一環として、『食事のことは』卓上カードと冊子『ごえん』(vol.6)「いのちをいただく」が本山にて作成されています。卓上カードは宗門関係学校である京都女子大学と協働して、デザインを刷新し両面印刷で仕上げています（サイズはポストカードと同様）。

希望者には**必要部数**(送料は着払い)を届けてくれるそうです。伝道本部 重点プロジェクト推進室(TEL 075-371-5181 FAX 075-351-1372)までご連絡ください。

ご家庭や、各種行事・研修会等にも積極的に活用させていただきます！



冊子「いのちをいただく」

大いなる
愛の
光
を
受け
て
歩
む